
青春と書いてラブコメと読む。

MICKEY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春と書いてラブ「メと読む。

【著者名】

MICKEY

N2759S

【あらすじ】

特に夢なし、目標なし。恋愛に興味なし、青春に興味なし。

ただ平穀な日々を送ればいい。何も考えずに騒ぐバカの方が、よっぽどバカ・・・。

そんな冷めた人生観を持つ織田夢人は、私立藍張学園に通う高校生。唯一の特技、物語の執筆だけを楽しみ、つまらない毎日を送っていた。

そして高一に進級した初日、突然悪友の神谷亮介に「書記」に推薦されてしまう！

「書記」って何！？へつ！？学級役員じゃない！？
は！？どうして「書記」が演劇部と関係あるんだよ！？
しかも最悪な第一印象を与えてしまった学校一（俺基準）の美女、
霧野咲が演劇部だつて！？

自分にしか出来ないこと

「青春」を己の理想の物語に書き換える為、今、夢人はペンを握る。
・・！

第一話「事件と書いてはじまつと読む。」（前書き）

初めましてー高校に入学したばかりのMICKEYという者です。初めて書いてみた学園物の小説・・・。いつも素晴らしい作品を呼んでいる皆さんから見たら、ダメダメですかね・・・。ですが初めて挑戦するジャンルで、精一杯書きままでの、どうぞよろしくお願いします！

第1話「事件と書いてはじまつと読む。」

君の人生に物語はあるか？君の青春に脚本はあるか？

人は誰しも社会の一員として生きている。その一人一人が世界と言
う大きな物語を構成する要素であり、その一つ一つにも物語はある。
もちろん君にも、そして僕にも物語はあるんだ。

だが・・・。その物語に君は満足しているか？普通の日常、普通の
青春、普通の人生

俺は満足していた。将来目指す物も無く、たいして毎日が楽しいわ
けでもない。

それでも平穀な日々を送っているというだけで、心の隙間を埋めて
いたんだ。

でも・・・。俺はそんな「何者でもない」自分から抜け出すことが
出来た。

あの日、俺の青春は始まった。

「ふう。」

間抜けな声を出し、俺はプリントに指示された席に座る。

今日から俺はここ、「私立藍張学園」^{あいばり}の第二学年に進級。つまり高
校一年生になつたつてワケだ。

高校受験に失敗し、公立高校に落ちた俺は滑り止めで受けたこの藍

張学園に入学。特に目標も持たないまま、つまらない一年を過ごしていた。

「よつ、織田！まああ同じクラスだな！腐れ縁つてヤツ？」

「うわっ・・・出たよ。やたらテンション高くてウザいクラスメイト。コイツの名前は・・・え？先に俺の名前？そついや、まだ言ってなかつたな。」

俺の名前は織田夢人。おだゆめと父親は普通のサラリーマン、母親は専業主婦のいたつて普通の家庭に生まれた普通の人間だ。

そこで、コイツの名前は神谷亮介。かみやうすけ小学校から一緒にいわゆる幼馴染つてヤツ。去年は一緒にクラスだったが、まさか今年もとは・・・。

「またやる気ねえ顔してるな、お前！今日から高一だぜ？もつとトシション上げろよな。それじゃ女子にもモテないぜ？」

「うるせーな。昨日、夜更かししてたから眠いんだよ。少しは寝かせや。」

事実、俺は昨日3時間しか寝ていない。何でかつて、そりや・・・。
「ほーう・・・さてはまた書いてたな？」

「だつたら何だよ。」

「お前・・・昔から本当に好きだもんな、物語書くの。」

そう。神谷の言つ通り、俺は物語を作るのが好きだった。それも小説でだ。

運動音痴で、部活はずつと帰宅部。顔もまさに平均ライン。学力は中の中。しかも性格は捻くれている。こんな俺に神様が授けてくれたのは、文才だけだった。

「んで？今度はどんな話書いてたんだ？」

「関係ないだろ。」

「ふ、わかるワケがない。」

「フム・・・その反応、恐らくアーネの一次創作か。」

「コイツ、いつも簡単に当てやがった。」

「何故わかった。」

「長年お前のこと見てりや 大体はわかるんだよ。」
何だと・・・悔れんな、この男。

キーンゴーン カーンゴーン

その時、チャイムの音が俺達の会話を遮った。

「おつと。じや俺、席戻るわ！」

神谷は右手を額に当て、敬礼のようなポーズを取る。爽やかに俺の悪友は自分の席へと戻り・・・。

「つてお前の席すぐ後ろじやねえか！――！」

番号順に並べられた席だ。つまり、五十音順・・・。俺は「織田」で「お」、アイツは「神谷」で「か」。席が前後になるのは必然とも言える現象だつた・・・。

その時、たまたま俺の視界に入った女子がいた。

俺がいる廊下側の列ではなく、窓側の列の一一番前に座つている一人の少女。

窓から吹き込んだ春風を受け、肩まである艶々のストレート黒髪が踊っている。

（可愛い・・・）

咄嗟に俺はそう思つてしまつた。自分の顔が赤くなつていいくのを感じる。すぐに俺は視線を逸らし、早くなりかけた鼓動を落ち着けた。

初めて見たな、あの子。この学校で一番可愛いんじゃないのか?だが・・・だからと言つて俺はどうする?「好きです!」って告白するのか?いや絶対フリれる。今まで告白した事なんかない。ずっと恋なんて甘い物から逃げてきた。そうだな、俺じゃ無理だ。忘れよう・・・。

「全員揃つてるか?」

太く低い声が教室に響く。え、この声って、学校一厳しきつて有名なあの教師の……。

「フン。揃つているようだな。出席を取る。一番、赤坂！」

「は、はい。」

その刹那

鷹のような鋭い目線が少年Aへ浴びせられる。

「声が小さい。お前は高一にもなつて口クな返事も出来んのか。」
静まり返る教室内の空氣。うわー、ハズレクジだよこれ。アイツが

担任かよ？

「す、すいません……。」

「もう良い。次、二番、井坂！」

飛ばされちゃつたよ。かわいそうに……。少年Aよ、君は何も悪くない。君の運が悪いんだ。

「はいっつ！――！」

なるほど、人は学習する生き物とは本当なのだな。少年Eはちゃんと大声で返事をした。

「次、三番、宇治坂！」

「は、はいっ！」

ほう、まさか教室に入つて数十秒で場の空氣を掌握するとは。噂通りだな、鬼教師。

「次、四番、江坂！」

「ハイ！！！」

このクラス、無駄に名字に坂がつく奴が多いな。

「次、五番、織田！」

にしても……本当にこんな鬼教師が担任かよ。とにかくツイてねえな、俺。

「織田！返事はどうした。」

はあ。しかもアイツ、国語の教師だろ？唯一の得意教科の教師があれじや、俺の一年終わつたな。

「織田ツツツ！――！」

ふと我に帰ると、俺の目の前には「桃太郎」に出てくる鬼がいた。

「はい・・・？」

「返事はどうした。」

「あ、え、えっと・・・。」

馬鹿、今すぐ謝って返事しろよ。何で焦ってるんだ、俺。

「新学期早々、返事すら出来ないのか。」

「ち、ちが・・・あの、俺は・・・。」

「次、六番、神谷！」

「はいっつづ！」

ビシツと決めやがったな、アイツ。辺りを見回すと、クラス全員が俺を見ている。

「あの人ダサイよね、返事も出来ないなんて。」

「つかめちや焦つてたし。ああいうナヨナヨした奴、無理だわ。」

「あーあ。まさか新学年になつて初日の朝のS-Tで破滅するとはね。まあいいか。どうせこんな何も考えずに毎日生きているよつな奴らと仲良くなる気なんぞ微塵もない。」

出席を取り終わり、鬼教師は教壇に上り黒板に名前を書き始める。

「いへんじゅまぜ
獄堂護」

「私がここ2・A担任の獄堂だ。知つてゐる者も多こと思つが、演劇部の顧問をやつてゐる。」

「マジすか。知らなかつたよ。つか獄堂なんて名前だつたんだ。厨二病の奴が「俺の事は・・・獄堂と呼んでくれ。」つて言つのとアントが言つのとじや随分違うと思うのだが？

つてかアンタ演劇部の顧問だつたんだ。今改めて帰宅部で良かつたと実感したよ。」

その後、獄道先生は教室から出て行つた。それと同時に、沈黙が解ける2・A。

「ううーわ・・・。ハズレだよな、あの担任。」

「か、神谷君もやつと思つ? わ、私も思つてたんだあ~。」

「うん? もしかしてこの声は神谷かな? 良い歳して独り言かよ。

「えつと狩谷さんだつけ?」

「あ、うん。栗原仁美。ひ、仁美で良いよ・・・?」

「んじや仁美! これから一年よろしくなー!」

「よ、よろしくねつ!」

ほう・・・大体状況は理解できた。よし、今日の帰りの電車で神谷に痴漢疑惑させてやる。

まあでも、神谷なんかに気を許す女子なんてきっと・・・。

振り向くとそこには、茶髪でショートヘアの女子がいた。ぴょこんと立つアホ毛が何とも愛くるしい。

ふつ・・・甘いな神谷。その女子は俺のタイプじゃない。俺はトイレへ行く為に席を立ち、教室の扉まで歩いて行く。そして、扉を全国平均値より低い握力で握りしめ・・・。

(超絶に可愛いだろがつ!-!-!)

あの仁美って子、タイプではないんだが一次元に匹敵するほどの美貌の持ち主だつた。

あのほんわかした口調からも、キャラが濃いことは容易に理解できた。

(チツ・・・まあアイツは俺と違つてイケメンだからな・・・。)

そう、神谷はイケメンなのだ。男の俺でもそう思う。少し長めのショートミディアムヘア、銀のピアス。前髪から覗く少年の様なピュアな瞳。高く細い鼻、二重でパッチリとした目蓋。正直、嫉妬する程に整つた顔立ちだつた。アイツは今まで何人もの女子に告白され、その全てを断つてきた。理由を聞いても答えようとしないから、余計にムカつく。

ただいつも、「俺の理想じやねえから。」とだけ呴いていた。どんだけ理想が高いんだよ、お前は。

ドンッ。

「あつ・・・。」

「とか何とか言ってたら、扉の所で誰かとぶつかった。

三、行

「？」

「えつと・・・織田君、だつけ？」

彼女がいた。俺がついさつき、心奪われた彼女が。アノ子が・・・！

「あ、う、うん！俺は織田ゆめ……。」

——「ね世でもう一でいい？」

この子、俺の必死の自己紹介を打ち消しやがった。

卷之三

卷之三

は
?

現に私の友達も引いてたし

何言つて人の「この人

卷之三

「アーリ根生タバコ」

「阿彌陀佛」這句話，是我們日常生活中最常說的一句佛號。

ガーデン舞祭あら?

「河でアイツの事知つてんだよ。つてか本人に面と向かつて言つが

？そんなこと。

俺、嫌われたって……よくわからないんですけど。

「かお前、顔と正反対の性格じゃん。顔は正直、口は嘘いのは何でそんなしゃれにならない性格なんだよ。」

あれ？俺、思つてゐ事と

言つてる事が逆になつてない？

時すでに遅し。俺の目の前の女子は、『デズビーム張りの睨みを俺に向け・・・。

「じゃあ一つずつ答えてあげる。アンタが獄道に嫌われたつて言つてんの。何で知つてるかつて？私、演劇部なの。で、アンタに直接言つてるのは忠告しといてあげようと思つたのよ。それで何？性格が顔と真逆？ええ、生まれつきこんな性格ですけど？」

俺の思考回路は完全にストップしていた。脳内で働く小人たちが囁く。「やつちやつたよ。」

「何アンタ？ 図星のコト言われてキレたつてワケ？マジ無理だから、そういうの。もう話しかけないで。」

そう言つと、名前も知らない彼女は席へと戻つて行つた。

「あ～あ、何やつてんの。」「女子と話す機会なんて中々ないのに、気になつてん娘にやつちやつたよ。」

黙れ、小人共。第一、貴様らが俺の心臓で暴れるから行けないんだ。ん？何？俺達は脳で働く小人で、心臓は部署が違うだあ？知つた事か！

・・・ふつ。見事に散つたな。気持ちいいぐらいだ。

ああ、そうですかそうですか。もう良いよ。つてかこちらこそ、そんな性格の女は願い下げだ。普通、黒髪ストレートと言えば礼儀正しいデレキャラかツンデレの一択だろ？あ、武士ツ子とかもあるが。いや、百歩譲つてヤンデレ。

で、アイツは何？あーあー、アレね、根暗な男子を毛嫌いするイマドキな女子高校生ね。

草食系の時代はファイナーレを迎えたらしいですね。

相変わらず神谷は隣の席の栗原仁美とお喋りに華を咲かせている。俺は拳を扉に叩きつけた。

「と言ひ事で、リーダーは演劇部に所属する霧野咲きりのさきで決定だな。次、

副リーダー。定員は一人だ。意思がある奴は手を上げろ。」

「ハイツ！」

「わ、私も！」

「フン・・・神谷と栗原か。他にはいなか？いなら決定する。

」
6時間目の授業はH.R。まあ、新年度の初日の授業なんてこんなもんだ。

で、今は学級委員でも決めてるのか？俺は周りを無視して、原稿用紙に小説の続きを書いていた。

「よし、神谷とか栗原で決定だ。次、書記だ。定員は一人。」

そこで教室内は沈黙する。フン、俺には関係ないけどな。俺はただシャーペンを滑らせ、次々と文字を書いて行く。が・・・。一、三 文字書いただけで、シャーペンの芯が折れるのだ。

（クソツ・・・！）

力チカチとグリップを押し、シャー芯を出す。だがやはりそれも折れてしまう。

（何だ？何だつてんだ？）

無性にイライラする。そこで脳内再生される、あの一言。「図星のコト言われてキレたつてワケ？」

うるさい！黙れ！もうこれで今日、132回目の脳内再生だ。何だよ。あんな女の言つこと気にしてるのか？俺が？こんなどうでも良いクラスのことを？

確かに可愛いとは思つたが、別に本気じやない。自分が初日から失敗したことを探されて、俺は悔しいのか？クラスに興味なんかないのに？

俺の理想の物語はこの紙の中にある。現実なんて退屈なモノに付き合つてる暇はない。

ただ俺は俺の力で、理想の世界を文字で執筆する！えがく

パシッ。その瞬間、俺の机から原稿用紙が消えた。

「なつ・・・・！」

「織田・・・・お前、わざからずつと周りを無視してこれを書いていたな。何だこれは。」

獄道護・・・・！

「別に・・・・ただの・・・・小説です。」

「小説？ フンッ・・・・。」

獄道は俺の小説を読み始めた。は！？意味わからんねーし。気に入らないなら没収しろよ、さつやとー！

しばしの間、沈黙が流れる。

その沈黙を、獄道が自ら破つた。

「ぐだらん。」

何・・・・だと・・・・！？ぐだらん！？俺の小説がぐだらない！？ふざけんなッ！そんな理不尽な事あるか！たつた数ページ読んだだけで、何がわかるつてんだ！？しかもこの小説は二次創作。原作を知らないコイツに、俺の小説が否定出来た義理か・・・・！？

「さあ、さつさと書記を決める。本当に立候補者はいないのか？」

「ぞけんなッシッ！－！－！」

その瞬間、俺は立ちあがり叫んでいた。あの獄道に向かつて。

「どうした織田？ 何か文句でもあるのか？」

「取り消せ。」

「何？」

「この小説をぐだらないって言つたこと、今すぐ取り消せよッ！」

思いつきり獄道の目を睨みつける。許さねえ、コイツ俺の小説を・・・

・！俺の唯一の特技を！

「ぐだらん物をぐだらんと言つて何が悪い。」

「じゃあアンタは俺の小説全部読んだのか？この原作を知ってるのか？よく知りもしねえで、よくもそんなツ・・・・！」

「勘違いするな。」

獄道は冷酷に、はつきりとそう告げた。

「別にお前の文章力や、その物語の原作を馬鹿にしているわけじゃない。つまらないのだよ、その小説自体が。」

「え・・・。」

「良い文章つてのはな、最初の一行を読めばわかるんだ。お前の作品はただの駄作だ。」

そうか、コイツ国語の教師をやつて・・・。けど・・・駄作だと・・・!?

「ただの自己満足でしかないんだ、お前の小説は。」

駄目だ・・・。何も言い返せない。俺は力尽きたように席に座つた。「フン・・・。話を戻す。書記の立候補がいないなら、推薦も認める。自薦他薦は問わん。」

「先生ッ！」

「どうした、神谷。」

「なら推薦したい奴がいます。」

神谷・・・? 一体何をやる気だよ、お前・・・。

「ソイツは書記に相応しいのか?」

「ええ。立候補はしませんでしたが、俺から見たらソイツしか書記を務められる奴はいません。」

書記を務められる・・・? 字が綺麗だつたら誰でも出来るだろ、そんなの。

「ほう・・・副リーダー一押しの書記か。誰だ、言つてみる。」

「ハイツ・・・それは・・・。」

「出席番号五番、織田夢人です。」

この時から、俺の毎日は変わりだした。俺も、周囲も、神様さえ予測できない程に。

これが俺の、「青春」の幕開けだつたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2759s/>

青春と書いてラブコメと読む。

2011年6月11日09時15分発行